

# 女が三人そろうとユタごと、そしてコーヒータ임

—沖繩本島 X 区における友人とユタのもとに  
足を運ぶ女性たちに着目して—

吉 田 佳 世

Sisterhood in Okinawan Shamanic Practice:

Case study of X Area in the Northern Part of Okinawa's Main Island

Kayo YOSHIDA

## 要 約

本稿は、沖繩の人びとがユタと呼ばれる靈的職能者のもとに赴き、託宣を受けたり、祖先祭祀に関わる祈願を依頼したりする行為のなかでも、友人とともにユタのもとに足を運ぶ女性たちに着目するものである。これまでのユタに関する研究は人類学における呪術・シャーマニズム研究の流れを受け、ユタ当人に着目する研究が主流であった。そこで依頼者に光を当てる試みとして、私が沖繩本島 X 区の女性たちとともにユタのもとに足を運んだ経験を主な事例として、依頼者である女性たちの側からユタのもとに足を運ぶという行為を捉え返し、考察を行った。その結果、依頼からその後の託宣を吟味する時間も含めてユタに相談するプロセスとして捉えると、コーヒータ임に代表されるように、女性たち同士のやり取りが多く挟まれていることが明らかとなった。そこでは友人と自分とを対比しながら、自分なりのユタや祖先祭祀への関わり方を模索する女性たちの姿が見て取れた。

### 1. はじめに

本稿は、沖繩の人びとがユタと呼ばれる靈的職能者のもとに赴き、ハンジ／ハンダン（託宣）を受けたり、祖先祭祀に関わる祈願を依頼したりする行為<sup>(1)</sup>のなかでも、友人とともにユタのもとに足を運ぶ女性たちに着目するものである。

笠原政治が「〔沖繩の祖先祭祀は〕祀られる者（祖先）と祀る者（子孫）、そしてそこに介在する職能者（ユタ）という、いわば三角形を構成するような関係」に基づいていると指摘したよう

に〔笠原 1989: 66〕、沖縄の祖先祭祀においてユタは非常に重要な位置を占めている。人びとは身の回りに何か不幸なことがあると、その原因を突き止めるためにユタのもとに足を運ぶことがある。それに対してユタが告げる託宣は、ウガンブスク（祈願不足）など、祖先祭祀の関連するものであることが多いとされる〔小田 1987〕。つまり、ユタは人びとに祖先祭祀を促す役割を果たしているのである。

これまでのユタに関する文化・社会人類学（以下、人類学と表記）・民俗学的研究は、呪術・シャーマニズム研究の流れを受け、ユタ当人に着目し、同じく沖縄の宗教的職能者であるノロをはじめとするカミンチュとの異同を論じるものが主流であった〔例えば櫻井 1983〕。あるいは、親族論の観点から、不幸の原因を祖先祭祀の問題に結びつけるユタの災因論が、門中（ムンチュウ）とよばれる父系的な祖先祭祀集団の形成や、男系的な位牌継承の伝播に大きく関わっていることを明らかにしてきた〔例えば松園 1970〕。

しかし、ユタが祖先祭祀に大きな影響を与えているのは、ユタのもとに足を運ぶ人びとがいるからこそ生じていることはいうまでもない。ところが、依頼者に光を当てた研究は、社会心理学からのアプローチが中心であり〔石垣 1983、高橋 1998〕、人類学・民俗学では、民族誌的記述のなかでは盛んに言及されるものの、主題として捉えられることはほとんどなかったといえる。

そこで本稿では、依頼者側に光をあてる試みとして、ユタのもとに足を運ぶという行為のなかでも、とくに女性たちの間で気軽に行われている、仲の良い友だち同士でユタのもとに赴くという行為に注目してみたい。「女が三人そろろうとユタごと（女が3人集まればユタのことをいい始める）」ということわざがあるように〔田畑 1997: 237〕、男性が排除されているわけではないが、ユタのもとに足を運ぶという行為は、中高年の女性たちが行うものとされる。この背景には、祖先祭祀の単位でもある家は男性しか継承しえないにも関わらず、実際に家々で行われる祭祀の運営の担い手は女性であるという、沖縄の性役割と関係があるとされてきた〔大橋 1998: 365〕。しかし、ことわざの響きからも分かるように、ユタのもとに足を運ぶという行為は、女性に期待された役割の延長線上にあるというだけでなく、女性たちが楽しみながら行う行為であることも見逃せない。

本稿では、私が2007年から今日に至るまで断続的に調査を続けている沖縄本島北部 X 区において得た女性たちの語りや、実際に私が女性たちとともにユタのもとに足を運んだ経験を主な事例とし、依頼者である女性たちの側からユタのもとに足を運ぶという行為を捉え返し、その意味を考察していくことにしたい。本稿のねらいは、ことユタに関しては迷信に縛られた存在として描かれがちだった女性たちを、現代沖縄という文脈のなかで、時に友だちと悩みを共有し、時に楽しみながら、伝統に対する自らの態度をも模索する存在として描き出すことにある。

## 2. 先行研究

### (1) 人類学・民俗学におけるユタ研究

沖縄には、祖先や神をはじめとする超自然的な存在と交流する霊的な能力をもち、その能力をもとに人びとの依頼を受けて託宣・ト占・祈願などを行うユタと呼ばれる霊的職能者がいる。ユタの多くは女性であるといわれる。冒頭でも述べたように、人びとは身の回りに何か不幸なことが起きると、その原因や対処法を探るためにユタヌヤー（ユタの家）に足を運ぶことがある。また、ユタは祖先祭祀の専門家でもあり、ユタヌヤーで託宣を行うのみならず、門中や各家々の依頼に応じて、葬送儀礼・年忌・位牌祭祀・墓祭祀・あるいはそれに関連した各種儀礼などを請け負うこともある。

人類学・民俗学においてユタの研究が進められたのは1960年代以降のことであり、今日に至るまでその研究成果は枚挙に暇がない〔リーブラ1974、櫻井1978、佐々木1984、村松2010、塩月2012、平井2020ほか〕。特に議論が重ねられてきたのは、同じく沖縄の宗教的職能者であり、村落祭祀を主導する女性司祭であるカミンチュとの比較研究である〔例えば、櫻井1978、1979、渋谷1992、森田1997〕。カミンチュとは、村落祭祀といういわば公的祭祀を担当する神役の総称である。男性神役に比べて女性神役の方が地位は高く、神役組織の最高位はノロという女性神役である<sup>(2)</sup>。カミンチュとなる人は、出自が重視されており、特定の家や門中において地位の継承がなされる。琉球王国時代においては王府の辞令書を受け、王府の祭祀組織において公的地位を与えられたとされる〔植松2008: 143〕。今日でもカミンチュの執り行う村落祭祀は、区の行事として行われていることが多い。

公的な存在としてのカミンチュに対して、ユタは、個人や家といった私的領域の祭祀を担う存在である。ユタとなる人は、自身の霊的資質を根拠としていることが多く、カミダーリといわれる心身異常体験（巫病）を経て、修行を積み、カミなどの超自然的存在と直接交流が可能となってミチアケ（成巫）となるとされる〔佐々木2008: 538〕。

ユタとカミンチュの比較研究の嚆矢となる論考を著した櫻井徳太郎は、人類学における呪術・宗教的職能者の分類に両者あてはめ、ユタはシャーマン（shaman）にあたり、カミンチュがプリースト（priest/priestess）にあたると述べている〔櫻井1979: 108〕。その上で、両者が沖縄の民俗宗教を支える車の両輪のような役割を果たしていること、女性が宗教領域において高い地位にあるという点で日本本土とは際立った差異がみられることを指摘している〔櫻井1978: 4〕。確認しておくこと、シャーマンとは意識変異状態（trance）となって、神仏や精霊などの超自然的存在と直接的に接触・交流する宗教的職能者であり、それに対してプリーストとは、狭義の宗教における司祭が好例であるように、意識変異状態にはならず、一定の集団や信者を代表して儀礼を執行するような宗教的職能者のことである〔佐々木1984: 108〕。

当初からユタがシャーマンにあたと指摘されてきたように、ユタ研究は呪術・シャーマニズム研究の一環として行われてきた。そのなかでも佐々木宏幹は、ユタの成巫過程や託宣・祈願等の場で起こる意識の変異状態に注目し、ユタがいかに超自然的存在との直接交流するののかについて、通文化比較の観点から研究をおこなっている。それによれば、特に託宣・祈願場におけるユタの直接交流の型は、神や祖先と直接対話し、その意思や命令を依頼者に伝達する予言型・靈感型である。これは東北地方のイタコのように神や死者を自身に憑依させる「口寄せ」を主な役割とする憑霊型・霊媒型のシャーマンとは異なる特徴もつものとして捉えられるという〔佐々木 1984: 117-118〕<sup>(3)</sup>。

このように人類学・民俗学のユタ研究は、ユタ当人に光を当てその特徴を論じるものが主流だったといえる。その背景には、人類学における呪術・シャーマニズム研究の手法の影響があったことは既に指摘した通りだが、特に沖縄という文脈においては、ユタ研究は、カミンチュに比して“まがいもの”とみなされることの多かったユタを、沖縄の文化のひとつとして積極的に捉え返すことも意図していた。

というのも、ユタという呼称は侮蔑的なニュアンスを含んでおり、ユタ当人が自称したり、依頼者がユタの面前で用いたりすることはない〔濱 2010: 68〕。また、ユタは、17世紀以降から今日に至るまで、為政者によって禁止令が出されたり、新聞社によるユタ批判が行われたりするなど、弾圧の対象となってきた〔塩月 2012: 44-50〕。そのため、今日でも人びとのユタに対するまなざしは両義的であり、聖なる存在あるいは沖縄文化のひとつとして肯定的に捉えられる一方で、金銭的な利益のために嘘をつく俗的な存在みなされることもある〔塩月 2012: 97-98〕。

付言しておけば、ユタを沖縄文化として肯定的に捉えようとする動きは、社会心理学や精神医学によるユタ研究のなかでも見られる。「医者半分、ユタ半分（病気になると医者に行くし、ユタにも行く）」ということわざがあるように、人びとにとってユタのもとに足を運ぶという行為は、依頼者やその家族の病気を治すために行われている一面がある〔吉田 2022〕。とくに社会心理学や精神医学による研究では、こうしたユタの民間医療者としての役割が強調されてきた。例えば、大橋英寿はユタを「野のカウンセラー」と称し、依頼者を「クライアント」と表現したうえで、ユタークライアント関係とそこでのやり取りが、精神分析療法における専門家－患者の関係、そしてその治療のあり方と重なる点が多いことを指摘している〔大橋 1998: 215-216〕。ユタを近代医療と地続きのものとして捉えるこれらの研究は、ユタを沖縄文化のひとつとして肯定的に位置づけることに大きく寄与してきたといえるだろう。

## (2) 依頼者に着目したユタ研究：とくに大橋英寿〔1998〕の研究に着目して

依頼者に着目する研究は、特に社会心理学からのアプローチが大きな成果をあげている〔石垣 1983、大橋 1998〕。そのなかでも 1970年代から 1980年初頭にかけて行われた大橋による依頼者に関する調査は、ユタヌヤーでの参与観察や依頼者への聞き取り調査、そして名護市在住の 20

代から 60 代の女性を無作為抽出して行った数量的調査から構成されており、極めて示唆に富む [大橋 1998：第 3 章、第 6 章]。

大橋が明らかにした依頼者の特徴を、本稿の関心に引き付けながら要約すると以下の通りである。第一に、依頼者は、結婚・出産して子どもがある程度大きくなり、本格的に主婦としての役割を担うことができるぐらいの年代にあたる女性たちが主であること、そして、それぐらいの年代にあたる女性たちのほとんどがユタのもとに向いた経験をもっているということである<sup>(4)</sup> [大橋 1998: 357-376]。第二に、女性たちが初めてユタのもとに向いた経験についての調査では、多くの場合、実母や姑などの年長女性とともに足を運んでいるということである<sup>(5)</sup> [大橋 1998: 376]。これはユタに相談に行くという行為が、祖先祭祀の担い手という主婦の役割と重なっていることに起因すると考えられる。家族の問題をその家の年長女性が代表してユタに相談するという依頼のやり方もよく行われ、それが姑から嫁あるいは母から娘へと引き継がれていく過程が見られるという [大橋 1998: 381-384]。なお、大橋の報告によれば、初めてユタに相談に行く時に友だちが同伴者となるのは、かなり少数派であった [大橋 1998: 376]。第三に、女性たちのユタへの相談内容は多岐に渡るが、まずは運勢判断をきっかけとしてはじまり、ついで行事の日取りや、葬送儀礼や祖先祭祀に関する相談を重ねるうちに関わりが深くなり、病気や財産に関することなど、個人や家庭の問題に踏み込んだ相談をするようになる「ユタ依存」の過程がみられるということである [大橋 1998: 383]。

大橋がユタをカウンセラーと地続きにあるものとして捉えていたことは先にも述べたが、その一方で、ユタヌヤーでのやり取りや、後日実施した依頼者への聞き取り調査をもとにした論考では、精神医療のカウンセリングとの違いが指摘されており興味深い。例えば、「公開カウンセリング」と称したように、ユタヌヤーで繰り上げられるユタと依頼者のやり取りが、順番を待つ人びとのいるプライバシー・ゼロの公開の場で行われるのはそのひとつであろう [大橋 1998: 164]。

そのなかでも大橋が大きな相違点としてあげているのは、依頼者が自分の目的をユタに告げることなく、ユタがその霊的資質をもとにそれを見抜けるかを試すのが、ユタへの相談の一般的なやり方だという点であろう。依頼者は多くを語らず、ユタが一方的に問題を指摘していくのである [大橋 1998: 161-164]。また、依頼者は、ユタの託宣を盲目的に受容しているのではなく、取捨選択したり、無視したりすることも珍しいことではない。相談したい内容が具体的であればあるほど、依頼者はあらかじめ予想・仮説を立てており、ユタがその相談内容を当てることができるか、さらには予想・仮説に一致するかが焦点となり、ユタは依頼者から試される立場におかれるという。しかし、大橋は、依頼者が優位に立つようもみえるやり取りが、ユタがその場を支配する自由度を与えていると考察している [大橋 1998: 213-214]。

依頼者がユタを試すということは、人びとのユタへの半信半疑の態度とも言い換えることができるが、依頼者が一人のユタの託宣だけではすぐにそれを受容することはなく、複数のユタのも

とに足を運び、複数の託宣をクチアワセ（照合）してから受容されることから、それがみてとれる [大橋 1998: 214]。この点は人類学・民俗学のユタ研究のなかではもちろん、沖縄の人びとにもよく言及されることである<sup>(6)</sup>。

しかし、大橋の調査から30年以上が経った今日、ユタとその依頼者をめぐる状況はいかに変化しているのだろうか。塩月亮子は、村落司祭を担うカミンチュが衰退の一途をたどっているのに対し、ユタは近代化・グローバル化の波にもまれながらも、そのますます勢いを増していると指摘している [塩月 2012: 12]。そして、インターネットの普及や個人主義的な新しいスピリチュアリティの興隆によって都市に住む日本本土の人びとがユタのもとに足を運ぶなど、依頼者の幅が広がったことを指摘している。

現代化による影響は、これまで依頼者として中心的な位置を占めていた中高年の女性たちにとっても無関係ではないはずである。そこで、本稿は先行研究ではほとんど取り上げられることのなかった、仲の良い友達とユタのもとに足を運ぶ女性たちの行為に着目して、その特徴を捉えていくことにしよう。

### 3. 調査地概要

沖縄本島北部・X区は、沖縄本島の東海岸と西海岸の距離が一番近づくところにある。今日、X区は市町村の行政区（字）となっているが、沖縄語の伝統的村落共同体を意味するシマから発展してきた地域である。シマとは、狭義の日常生活圏——地理学的概念としての集落——であると同時に、人々のアイデンティティの基盤となり、死後の世界をはじめとする超自然的世界を象徴する宗教的な意味合いをもつ空間のことである [吉田 2022]。

2022年11現在、X区の人口は2,096人（男性1,059人、女性1,037人）、世帯数は982世帯である [X区事務所資料]。隣接する市からの移住者の増加にともない人口は増加傾向にある。区のなかには、食品や雑貨を扱う小さな商店やコンビニエンスストアを除けば、市役所等の各種公共施設・学校・病院・銀行・大型スーパーマーケット等の施設はない。それにも関わらず人口は増加傾向にある。この要因のひとつとして指摘できるのは、交通や生活の利便性の高さである。自家用車を必須とするものの、隣接する市の市街地がX区の近くに形成されているため、各種公共・商業施設へは10分～15分程度で行くことができる。また、高速道路を利用すれば名護までは40分、那覇まで1時間強でアクセスすることができる。また、隣接する市に近い位置に、従来森や畑であった土地を切り開いた住宅地が形成されており、若者世代の向都離村の傾向を抑えられるとともに、隣接する都市からも移住者が増加を推し進めている。

X区には2000年初頭まではユタを生業とする女性いた。しかし、断続的ながらも私が調査を継続している2007年から現在に至るまで、X区に在住するユタやそれに類する人物はいない。そのため、人びとはユタに託宣や祈願を依頼する場合、もっぱら区外のユタのもとに足を運んで

いる。ユタの靈的な資質を試すこと意図して、自分たちのことを知らない遠方のユタのもとに足を運ぶということもよく行われる。自家用車を利用すれば1時間以上はかかる沖縄本島中部・南部に住むユタのもとへ足を運ぶこともめずらしくはない。管見の限りであるが、X区の人びとの依頼が集中するユタの存在はおらず、人びとは様々なユタのもとに足を運んでいる様子が見られる。

#### 4. 事例：仲の良い友だちとともにユタのもとに足を運ぶ

以下の事例は、2007年から現在までの断続的な調査のなかで、私がX区の女性たちとユタのもとに足を運んだ経験や、女性たちの語りから得られたものである。今回、中心的に取り上げる私が女性たちとともにユタのもとに足を運んだ体験は、2010年7月のことである<sup>(7)</sup>。

##### (1) 依頼に至るまで：同行者の存在

先行研究でも指摘されているように、X区でも頻繁にユタのもとに足を運んでいるのは主に40代以上の中高年の女性たちである。しかし、女性たちのユタに対する態度は、一様ではない。ユタに頻繁に通っている人がいる一方で、「好きではない」「ほとんど関わりがない」と語る人もいる。ただし、年忌行事の依頼や、人が亡くなるとその故人の意向を尋ねるためにユタヌヤーに行く習慣は今日でも行われており、中高年であれば性別を問わずユタに依頼した経験をもっている人も多い。

ユタに対する態度の違いは、ユタのもとに足を運ぶ女性たちの間でもあり、目的や頻度、熱心さは人それぞれである。たとえひとりの個人であっても文脈によっても依頼のやり方は一様ではない。ある時はプライベートな行為として家族や親族に告げることなくユタに相談に行くこともあれば、ある時は世帯や親族の代表者として年忌行事等の祖先祭祀をユタに依頼するということもある。こうした依頼のバリエーションの多さは、当初はあくまで個人的な相談として行われたユタへの依頼が、次第に世帯成員や親族の問題として共有され、家や門中を単位とする祖先祭祀の遂行へと拡大していくことにもつながりやすい。そのなかでも、本稿の主題である仲の良い友だちとともにユタのもとに足を運ぶという行為は、女性たちが個人的なものとして行うユタのもとへ足を運ぶやり方だといえる。

友だちとともにユタのもとに足を運ぶという行為を考える上で確認しておきたいことは、ユタに依頼するという行為が、そもそも同伴者を伴って行われやすいという点である。というのも、「ユタは看板のない商売」といわれるように、ユタは自宅で依頼を受けていることが多く、巫業を行っていることが必ずしも広く知られている訳ではない。依頼者はじめとする周囲の人びとの口伝で徐々に知られていくものであるという。つまり、ユタがどこにいるのか、ユタヌヤーがどこにあるのかは、一見するだけでは分からない。そのため、ユタに依頼したければ、知人等から

ユタに関する情報を得た上で適任であるユタを見つけ、紹介者を通じてそのユタに依頼しなければならないのである。

ここでの紹介者の役割は重要である。紹介者はユタに連絡を取り、依頼者の人物や相談内容について大まかな内容を伝え、依頼が可能であるかを確認する。このような手続きを踏むのは、「ユタにも能力の違いや得意分野があり、引き受けられない依頼もある」からだという。このユタにも得意分野があるという人びとの認識からは、「ひとりのユタのハンダンを鵜呑みにせず、複数のユタのハンダンを聞いたうえで最終的に正しいかどうか見極める」と人びとが語ることの理由の一端も見えてこよう。つまり、人びとはユタの能力を全能とはみておらず、あくまで部分的なものと考えているのである。そのためユタによく依頼する人であっても、懇意にするユタがいたとしても、知り合いを通じてユタについての情報を得て、行ったことのないユタのもとに足を運ぶことは、極めてよく行われることである。そのため、ユタによく依頼する女性たちの間では、ユタに関する情報交換がよく行われている。女性たちが“ユンタク”あるいは“コーヒータム”と呼んでいる気軽なお喋りの時間は、ユタに関する情報交換をする絶好の機会である（以下、本稿ではコーヒータムという言葉を使うことにする）[吉田2016]。

紹介者はユタから了承を得ると、依頼者に連絡し、ユタとのやり取りやユタヌヤーの場所等を伝える。前述したように、ユタヌヤーがどこにあるか分かりにくいことも多いため、場所についてはとりわけ丁寧な説明が必要となる。このプロセスのなかで紹介者が依頼者をユタのもとに連れていくということも起こりやすい。実際、私は、女性たちがユタヌヤーに足を運ぶための相談をしている場に何度か居合わせたことがある。依頼者と紹介者との取りの結果、紹介者が同行するということがよくあったことはもちろん、同席した女性も含め数名でユタのもとに行くことに決まったこともあった。また、私がユタにインタビューしたいと女性たちに相談した時も、直接依頼しようとする私に対し、女性たちは紹介者を通じて依頼するものであることを教えてくれたうえで、その仲介を引き受け、ほとんどの場合、当日も道が分からないだろうという配慮から同行してくれたのである。

## (2) 友だちとユタのもとに足を運ぶ

では、友だち同士でユタのもとに行く女性たちの行動を具体的に見ていくことにしよう。ここで取り上げるのは、2010年7月にAさんとBさん（ともに60代）が、私をユタヌヤーに連れて行ってくれた時のことである。AさんとBさんはいずれもX区に居住しており、普段から親しく付き合っている間柄である。私はよく彼女たちのコーヒータムに参加し、彼女たちに色々なことを教えてもらっていた。彼女たちは、誰かに私のことを紹介する時はいつもドゥシグワー（友だち）と紹介してくれていた。

AさんとBさんによれば、友だちとともにユタのもとに足を運ぶことは、よくあることだという。悩みを抱えている友人の相談にのるなかで、一緒にユタのもとに行くことも珍しくないそ



うだ。実際、私は、Aさんがとある女性の相談にのった後、ユタヌヤーに行く約束をしているところを見たことがある。その時のAさんは、私に以下のように語っている。

「沖縄では悩みを抱えている人を周囲の人たちがユタのところに連れていくということはよくある。私がユタヌヤーに行ったのも、あることで悩んでいた時に友だちが、『なんでも当たる面白い人がいるから一緒に行こう』といって連れて行ってくれたのが最初だった。当時、ユタは嘘ばかりつくと思っていたし、その友だちが連れて行ってあげなければ行こうとも思わなかったはずである。今でも、ユタを信じているかと聞かれたらそうでもない。でも、生きていく自分の力ではどうしようもないことが起こるし、薬にでもすがりたいという気持ちもある。誘う人たちとしても、気晴らしになればと思って誘う。悩んでいる人をほっておかないというか、ひとりにしてはいけないという気持ちからの行動でもある」

その一方で、AさんとBさんは悩みの相談というかたちではなく、もっとカジュアルなかたちで友だちとともにユタのもとに足を運ぶこともあるという。例えば、友人とのお喋りのなかでユタの話題がでて、「当たるかどうか試してみよう」と、ドライブがてら数人と行くのだという。そうすると「ユタの能力が分かる」、あるいは「数人で行っても、相談をするのがひとりなら1名分の料金で済む」メリットもあるという。しかし、とあるユタのところに友人6人で行ったときは、1名分の料金では済まず、全員が相談料を払うことになったことがあったそうで、今でも「あのユタは偽物だった」と、笑い話として話題にのぼるといふ。

友だちとユタのもとに足を運ぶというのは極めてよくあることのようにだが、その一方で興味半分ともいえるようなユタへの相談は全ての女性たちがする訳ではないようだ。AさんとBさんにしても、踏み込んだユタへの相談は、AさんとBさん、そしてやはり親しい友人であるCさん（50代）と3名で行くことが一番多いという。Cさんは、X区に古くからある門中の旧家に嫁いだ女性である。ブツダンゴト（祖先祭祀）やユタに関する知識も豊富で、Cさんからユタの情報を教えてもらうことも少なくないという。3人で行くのは、信頼できる間柄であること、また「一緒にハンダンを聞いてもらえる」ことも理由であるという。

ところが、AさんとBさんが気軽な気持ちで友だちとユタヌヤーに行く時には、Cさんを誘うことはあまりないという。というのも、Cさんはそうした安易なユタへの依頼をよく思わないのではないかと彼女たちは考えているからである。Cさんは長男嫁として婚家の祖先祭祀の中心的な担い手であり、祖先祭祀行事も欠かすことなく行っている。それに対してAさんとBさんは、どちらかといえば祖先祭祀にはあまり関わらなくてもよい立場にあるという。あくまでAさんとBさんの印象であるが、自分たちもそれぞれに抱えていることを相談するのだが、Cさんは祖先祭祀に関わる踏み込んだ相談をしており、「自分たちよりもユタのハンダンを真剣に聞いていると感じる」といふ。このように女性たちのユタの託宣や祖先祭祀に対するスタンスの違い

いは、ユタのもとに足を運ぶなかでお互いに見えてしまうものである。

補足しておく、ユタに対する態度の違いから、友人と疎遠になることもある。いまひとり私がよくコーヒータイムをしていた D さんは、ユタがきっかけで友人と縁が切れてしまった経験を語っている。最初は「占いに行くような気持ち」で友人に付き合っていたが、友人がユタのいうままにウガングトゥ（拝み）に取り組んでいく様子を見て、「それはできない」と思ったという。次第に話も合わなくなってしまう、最終的には縁が切れてしまったという。この経験から D さんはユタのことも祖先祭祀などの拝みに関わることも「すっかり嫌になってしまった」という。

### (3) ユタヌヤーにおける多声性

当日、私は A さんの自家用車に同乗し、ユタヌヤーに行くこととなった。向かったのは X 区に隣接する市の I さん（女性・60代）の自宅である。到着すると A さんは慣れた様子で I さんの自宅の勝手口の扉をあげ、「ちょっといいね。見てほしいんだけど」と I さんに声をかけた。そして私に「(I さんは) 友だちでもあるわけさ」と告げた。後で聞くと、I さんが相談を受けている時間は分かっていたため、私たちが行くことは伝えていなかったという。

I さんへの相談は、私が依頼するという形で行われた。A さんと B さんとしては、私が研究を目的として来たことは黙っていた方がよいと考えていたようだが、研究倫理の観点から人類学的調査を目的としてここにきたこと、私の運勢も見てほしいが、インタビューもさせてほしいことを伝えた。I さんは私の依頼に「いいよ」と了承し、「(I さんのもとには) 医者や教師もよく来るんだよ」と教えてくれた<sup>(8)</sup>。

I さんの家には I さんが迎えた神<sup>(9)</sup>を祀る大きな祭壇があり、祭壇の前で I さんと私が向かい合って座り、すこし後方に A さんと B さんが座った。座卓には依頼者の生年月日や相談内容を記述するためのノートが置かれていた。I さんは、私の生年月日や家族について尋ねた後、祭壇にある香炉に線香を立て、手を合わせて拝み、静かに息をはき沈黙し、聞こえないほどの声で何かをつぶやいた。そして私の方に向き直り、「長らくこの仕事を続けるが、大きな転機があり別の仕事をするようになる」こと、「亡くなった祖先のなかでも（私を）ずっと心配してくれている人がおり、今も側にやってきて見守っている」と語った。そして、そのためにも「祖先を大事にすること、お墓だけでなくヤシキをきれいにすることが大切だ」と告げた。

私がどう答えてよいか戸惑っていると、後ろから B さんが「沖縄ではヤシチヌウガンっていうのがあるさね」と声をかけてくれた。ヤシチヌウガン（屋敷の拝み）とは、人びとが暮らす屋敷にいる神々を拝み、悪霊の侵入を防ぎ、家内安全などを祈願する儀礼である [渋谷 2008: 524-525]。それを受けて I 氏は、A さんと B さんに向かって、「年 1 回しかやらない人もいるけど、本当は旧暦 2 月と 8 月に二回やらないといけない。旧暦 8 月のヤシチヌウガンをせずに、旧盆前にシバサシ（ゲーンと呼ばれるススキの葉を束ねた魔よけを、屋敷の四隅等に刺し、悪霊の侵入

を防ぐ年中行事のこと)をする人もいるけど、ヤシキを清めてからシバサシをしなければ全く意味がない」と語った。そして「ヤシキの中だけではなく玄関や外側もよく見なければいけない。例えば、壁にドロバチの巣が付いているのは良くない知らせである」といった。Aさんが「それは初めて聞くさ」と応答すると、Iさんは、私に祖先のシラシ(知らせ)は色々なかたちであられることを説明したうえで、Aさんの方を向いて「ドロバチの巣は自分で取ったらい」と告げた。

その後は、私がIさんにインタビューをする形となった。その内容に簡単に触れておくと、Iさんは2010年時点で、ヒトゴトをして(ユタとして依頼者の相談を受けて)20年ほどになることだった。ユタとしての能力に加え易学の知識も用いながら、ウンセイゴト(運勢)とソセンゴト(祖先祭祀)の両方の依頼を受けているという。日中はオガミ(拝み：依頼者の家や聖地に赴き祈願や祭祀を請け負うことを指していると考えられる)の依頼を受けており、夕方から自宅でハンダンの依頼を受けている。依頼者は、初めてやってくる時は一人ではなく何名かでやってくる事が多く、友だち同士や職場関係のつながりでやってくる人が多いという。しかし、何度も通うなかで、依頼者が家族を連れてきたり、またIさんが家族や配偶者と来るよう依頼者に促すこともあるという。

#### (4) コーヒータイム：ハンダンを吟味する

その後、私たちはIさん宅を出て、Bさんの家でコーヒーをご馳走になることにした。コーヒーを飲みながら、これまでのAさんとBさんの経験を踏まえ、今回の私の依頼やIさんのハンダンについて話し合った。

Aさん「Iさんは質問には答えてくれたけど、佳世さんについては何もいわなかったね。依頼する人によってはもっと色々なことをいわれる。私が友だちと行ったときは、もっとずっと喋っていた。私の相談で行ったのに友だちの相談になってしまった時もあるぐらい」

Bさん「『研究で来た』といったから警戒したのかもしれないよ。黙っておけばよかったのに。(「最初から自分のことは話さないのか」という私の質問に対し)先にいってしまったら、当たっているかわからんさ。(Aさんに向かって)ところで、Iさんのところは、以前は外に人が待っているぐらい人気だったのに、今日は全くいなかったさ」

Aさん「最近はどうでも(忙しく)ないようだよ」

そして、BさんはIさんのもとに行くのは数年ぶりだったことも話してくれた。「IさんのハンダンはAさんには合うけど、自分には少し合わない」と感じたため、行かなくなったという。というのも、Bさんは、ユタやそれに類する人<sup>(10)</sup>から、「シジダカイ(霊的な資質が高い)」こ

と、「ブツダンゴトを正す役目があたっている」ことを、指摘されるのだという。また、Bさんは持病を抱えていることから、「持病が役目を担うようにという祖先のシラシなのかもしれない」と思うことがあるという。「役目から逃げると家族に影響が行く」という話も聞いたことがあるため、Bさんの悩みのひとつになっている。しかし、Iさんのところでは、Bさんのこの悩みについて言及されることはなかったことに加え、他のハンダンについても「あまりピンとこなかった」のだという。

また、私は、ハンダンのなかで墓やヤシチヌウガンが言及されていたことを踏まえ、「墓やウガングトウについてユタからいわれことはよくあるのか」とふたりに尋ねた。AさんとBさんは、ユタは祖先祭祀や年中行事についてよくいうものであること、そして、ふたりがユタから受けたハンダンをきっかけに、門中の本家で行われる祖先祭祀のひとつであるウマチーに参加するようになった話をしてくれた。ウマチーとは、旧暦5月15日、6月15日、8月10日に行われる、門中の成員が本家に集まり健康祈願を行う行事である。X区では、年長者や祖先祭祀に関心の高い人びとが集まる傾向にある祖先祭祀である。

参加するようになったのは、Aさんがユタから受けたハンダンがきっかけだったという。あるユタに息子のことを相談したところ、息子の問題の原因はAさんが祖先祭祀を怠っていることにあると指摘されたという。「子どもを生かすも殺すも母親次第である」といわれ、ウマチーに行くよう厳しくいわれたという。それまでAさんは、祖先祭祀をはじめとするウガングトウは、「とても嫌いだった」と話す。ウマチーのために本家を訪れた時は、シンセキの年長の女性に「雪が降るんじゃないか」といわれたほどであったという。

Aさん「全部は信じないよ。婚家には長年熱心にブツダンゴトをやっているシンセキがいるから、出しゃばってはいけないとも思っている。でも、子どもに影響が行くといわれたから、後悔すると思った。自分が気に入ったこと、共感できるユタの教えがあれば参考にすればいいと思っている」

また、BさんもAさんが受けたハンダンをきっかけにウマチーに行くようになったそうだ。

Bさん「Aさんは長らくブツダンゴトから逃げていたのに、『ウマチーに行く』っていうからびっくりした。私も行ってみることにした。ウチのダンナのところはタシマ(X区外)にある大きな門中で、本家に行くのははじめてだった。何十人と人が集まっていて、とても喜んでくれて、ムンチュウの歴史について教えてくれた。行ってみるのもいいねと思ったよ」

## 5. 考察：悩みを共有し、参照する女性たち

以上、X区の女性たちの語りや、私がAさんとBさんとともにユタヌヤーに行った経験をもとに、女性たちが仲の良い友だちとともにユタのもとに足を運ぶ様子を見てきた。本章では、先行研究と重なる点を確認しつつ、これまであまり言及されてこなかった点を指摘していきたい。

改めて本稿の事例をみてみると、先行研究で指摘されてきたユタと依頼人の特徴と重なる点も多い。ユタ当人の特徴という点でいえば、本事例のユタも女性であり、託宣の場における超自然的存在との交流の型は予言型・靈感型であった。祖先祭祀に関連する託宣を告げるという点も共通している。依頼者においても、X区においてユタの依頼者は中高年の女性たちが中心であるとされる。ただし、ユタに対する態度は一様ではなく、よく通っている人でも違いがあるようだ。もちろん、ユタから一線を引いている人もいる。

そして、大橋が、「公開カウンセリング」と称した、ユタと依頼者とのやり取りも重なるところがある。しかし、大橋のそれを称した根拠が、後ろで順番を待っている客であったのに対して、本稿の事例は同行した友人たちである。そもそも紹介者を介して依頼をするというユタヌヤーの仕組み自体が、同行者をともないやすいことは既に示した通りである。託宣の場においても、AさんやBさんたちは、ただ傍で見て託宣を聞いているだけでなく、口をはさむこともあった。ユタも、私ではなくAさんやBさんに向かって語りかけることもあった。ユタのもとに足を運ぶという行為は、そこに至る過程を含めて閉じられた空間ではなく、ユタと依頼者の関係を軸としながらも、同行者が参与する余地を多分に含みこむ実践であることが確認できる。

また、大橋が指摘した、依頼者がユタを試すとといった、ユタに対する半信半疑の態度も見て取れた。それはAさんとBさんが、「当たるかどうか試してみる」ために気軽にユタのもとに足を運んでいるということ、私が調査を目的として来たことを黙っていた方がよいと考えていたことなどに端的に現れている。彼女たちは、Iさんが私に何を告げるのか、待っている客がいるかなど、様々な点からIさんの霊的資質が本物であるかを見極めるために観察しているようにも見えた。加えて、コーヒータイムのなかでBさんが、「Iさんのハンダンには自分には少し合わない」と考えるに思い至った経緯も、依頼者があらかじめ予想・仮説をたてて、複数のユタのもとに足を運びながら検証するという大橋の指摘と重なる。

その一方で、先行研究ではあまり言及されてこなかった女性たちの特徴も浮かび上がってきたのではないだろうか。特に本稿の事例から見てきたのは、友人とともにユタのもとに足を運ぶことが、よく行われるユタへの相談のやり方とみなされている点、そして、その過程にはコーヒータイムに代表されるように友だち同士のやり取りが多くさしはさまれているという点である。ユタの選定や依頼、当日の行き帰りの道中、そして終わった後のユタの告げた託宣の吟味に至るまで、彼女たちは実に多くの時間を共有し、様々なやりとりをしている。

そして、友人とのやり取りからは、1) 女性たちがユタを見極めていると同時に友人たちのことも見ているということ、2) ユタのもとに足を運ぶという行為が、祖先祭祀やその担い手となるという役割を検討する契機になっているということが見えてくる。

まず、第一点目の友だちも見ているという点は、女性たちは、友人に向けられた託宣を聞いてだけでなく、友人の置かれた立場やユタのもとに向いた本意はもちろん、友人がユタの託宣をどのように受け止めているかも見ることができるといことである。本稿の事例からは、女性たちが、友人が受けた託宣や友人が取った反応や態度を自分自身に照らし合わせ、共通点や相違点を見出していることが伺えた。具体的には、BさんとAさんが、いまひとりの親友であるCさんの置かれた立場や託宣に対する反応をみて、自分たちとの違いを見出していることもそうだろう。あるいは、祖先祭祀から一歩引いた態度をとっていたAさんが祖先祭祀行事に行くことにしたことへ驚き、自分も行ってみることにしたBさんの行動からもそれが見て取れる。あくまで私の推測にすぎないが、これまで自分と似た態度をとってきたAさんがウマチーに行ったからこそ、Bさんは背中を押されたのではないだろうか。ユタは依頼者に対してのみ声をかけるわけではないことは既に指摘したが、このことは受け手側にとっても当てはまる。女性たちは、友人が受けた託宣を、自分のものとして受け止めたりもするし、拒絶したりもするのである。

このことを祖先祭祀の担い手という女性に期待される役割という点から捉え返してみよう。これが第二点目の友人同士のやり取りからみえる特徴として私が示したいことである。先行研究において女性たちは祖先祭祀の担い手という主婦の役割の一環としてユタのもとに足を運んでいることが指摘されてきた。しかし、本事例からは、むしろユタのもとに足を運ぶことが、女性たちにとって祖先祭祀やそれに関わる役割に向き合う契機となっていることが見えてくる。ことAさんとBさんは、祖先祭祀から一歩引いた態度をとっているにも関わらず、祖先祭祀の専門家であるユタのもとに足を運ぶというある意味矛盾した行動をとっている。こうした行動が可能となる背景には、ユタヌヤーが様々な依頼を許容する自由度の高い場であるという点も指摘できるが、何よりも女性たちにとって、前後のやり取りを含め、友だちとともにユタのもとに足を運ぶことが楽しいという点も大きいだろう。その結果、本事例のように私の相談だったのにも関わらず、AさんとBさんが祖先祭祀や年中行事をするよう促されたり、Bさんのように「婚家のブツダンゴトを正す役目があたってている」という託宣を受けたりしている。

しかし、彼女たちはユタが示す祖先祭祀の担い手という役割を、必ずしもそのまま受け入れている訳ではない。Aさんの「自分が気に入ったこと、共感できるユタの教えがあれば参考にすればいいと思っている」という語りからは、友人とともに託宣を吟味したり、友人たちの様子を見たりして、自分なりの祖先祭祀に対する折衷案をとろうとしている様子が見える。そこでは、仲の良い友人は、祖先祭祀に関わるよう背中を押したり、踏みとどまらせたりもするだろう。もちろん、補足的に取り上げたDさんのように、友人とのあまりの違いを感じて、祖先祭祀から

完全に遠ざかってしまうこともあると考えられる。

## 6. おわりに

本稿では仲の良い友人とともにユタのもとに足を運ぶという女性たちの行為に着目し、その特徴と意味を考察してきた。その結果、依頼からその後の託宣を吟味する時間も含めて、ユタに相談するプロセスとして捉えると、コーヒータイムに代表されるように、そこには女性たち同士のやり取りが多く挟まれていることが明らかとなった。この点は、ユタ当人の研究、あるいはユタ－依頼者の関係に注目するこれまでの研究では見過ごされていた点である。本稿からはユタ－依頼者という二者関係には収斂しえない、依頼人－同行者、女性たち（依頼人たち）－ユタなど、複数の関係があることが見えてくる。

また本稿では、コーヒータイムのなかで女性たちが何をしているのかについても考察した。ここでは、友人の置かれた立場や受けた託宣、友人がその後どうしたのかまでも見聞きし、自分との共通点や相違点を見出している女性たちの姿が見えてきた。そうした友人の様子は、女性たちにとって自分はどうするのかを考える上で大きな判断材料になっているのである。

また本稿からは、友人とともにユタのもとへ足を運び祖先祭祀を行うよう促されるうちに、女性たちが祖先祭祀に対する意識を変化させていく様子も浮かび上がってきた。しかし、女性たちは、促されたことをそのまま受容している訳ではない。複数のユタのもとに足を運び、そして友人とのやり取りを通して、自分が祖先祭祀にいかにもきあうのか折衷案を出そうとしている様子が見て取れるのである。

AさんやBさんのように、祖先祭祀を担うという女性の役割から距離を置きたいと考える人は、今後も増えていけよう。そうした文脈において、ユタは女性たちを伝統的な役割に引き戻す役割を担っていることは間違いない。それが可能となっているのは、ユタのもとに足を運ぶという行為が、女性たちにとって楽しみの一環として行われていることも大きい。コーヒータイムのなかで笑いが絶えなかったことは強調しすぎてもし過ぎではない。家や門中といった親族を単位とするものであるはずの祖先祭祀が、友人と過ごす楽しみの中で喚起され、促されていくのは興味深い。

私はこの論考を完成させるまで随分と時間がかかってしまった。それは、「子どもを生かすも殺すも母親次第である」というAさんが受けた託宣を聞いた時、彼女の身の回りで起こった不幸を自己責任あるいは母親の責任とするようなユタの託宣を肯定的に捉えることができなかったことが大きい。それは今でもそう考えている。しかし、Aさんは、ユタのもとに足を運ぶなかでBさんとCさんと悩みを共有し、また同時に友だちの悩みにも寄り添っていた。そうした女性たちのつながりが、彼女たちを励まし、心の支えになっていることは間違いないだろう。

注

- (1) ユタから託宣を受けたり、祈願を依頼したりする行為は、沖縄では「ユタ買い」あるいは「ナライゴト」という。しかし、ユタという呼称、またユタ買いという表現は侮蔑的なニュアンスを含む。本稿では先行研究においてユタという呼称が長らく使われてきたこともありこの名を使用するが、「ユタ買い」については、本稿ではできる限りこの表現をつかわず、「ユタのもとに足を運ぶ」「ユタに相談する」と表記する。
- (2) 沖縄本島では村落祭祀の最高位にたつ女性神役をノロと称するが、神役の呼称は地域によって異なり宮古・八重山群島ではツカサ、サスと呼ばれる〔植松 2008: 143〕。
- (3) ユタのなかにもクトゥユシ（口寄せ）を行うことができる者はおり、憑霊型のシャーマンがいない訳ではない。沖縄には人が亡くなるとその故人の意向を尋ねるためにユタのもとに足を運ぶという習慣があり、そこではクトゥユシのできるユタが探されることもある。また塩月はユタが成巫過程のなかで経験するカミダリーのなかで、天界や竜宮などを訪れるという体験をしているユタも多く、脱魂型シャーマンとして捉えられることを指摘している〔塩月 2012: 25〕。
- (4) 大橋の調査によれば、ユタへ「出向いたことがある」と答えた女性は全体ではおよそ6割であり、20代は2割弱にすぎないが、30代からは半数以上が、50代を超えると8割以上が出向いたと回答しているという〔大橋 1998: 375-376〕。
- (5) 石垣みき子も 1973 年の調査をもとに、ユタのもとに足を運ぶ際に同伴者を伴っていることが全体の3割に上り、その代表例は母親や姑であると指摘している〔石垣 1983〕。
- (6) 後藤晴子は人びとが迷信に対する半信半疑の態度をとりながらも、迷信に従ってしまう行動を可能にする論理について考察しており興味深い〔後藤 2009〕。
- (7) 本稿では個人の特定を避けるため、実名は避け、議論とは関係ない情報は省略して記述した。また、個人的な事情が含まれていることから、部分的に改変を加えているところもある。
- (8) I さんの「医者や教師もよく来る」という発言は、様々な背景をもつ依頼者が I さんのもとに足を運んでいるという意味でもあるが、同時に自らの霊的資質が優れていることを依頼者に主張するための語りであると考えられる。
- (9) I さんによれば、祭壇には複数の神が祀られており、そのなかに I さんがユタになる前に行った「前世を知るための拝み」の際に判明した、琉球王国時代に王府から辞令をうけた女性神役も祀られているという。

参考文献

- 石垣みき子 1983「民間巫者と依頼者」『沖縄民俗研究』4, pp.12-31。  
 植松明石 2008「カミンチュ」渡邊欣雄ほか（編）『沖縄民俗事典』吉川弘文館、p.143。  
 小田亮 1987「沖縄の『門中化』と知識の不均衡配分：沖縄本島北部・塩屋の事例考察」『民族学研究』51(4), pp.344-374。  
 笠原政治 1989「沖縄の祖先祭祀」渡邊欣雄（編）『環中国海の民俗と文化3・祖先祭祀』凱風社、pp.65-94。  
 後藤晴子 2009「民俗の思考法：『とわかっている、でもやはり』を端緒に」『日本民俗学』260, pp.35-65。  
 佐々木幹宏 1984『シャーマニズムの人類学』弘文堂。  
 ———— 2008「ユタ」渡邊欣雄ほか（編）『沖縄民俗事典』吉川弘文館、pp.537-538。  
 塩月亮子 2012『沖縄シャーマニズムの近代：聖なる狂気のゆくえ』森話社。  
 渋谷研 1992「対峙する神々：宗教職能者間の対立と共存をめぐる一考察」『民族学研究』56(4), pp.361-384。  
 高橋英寿 1998『沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究』弘文堂。  
 田畑千秋 1997『南島文化叢書 19 奄美・沖縄女のことわざ』第一書房、p.237。  
 濱雄亮 2010「足枷から資源へ：ユタ評価の重層性」『サイバー大学紀要』3: pp.67-87。  
 平井芽阿里 2020『ユタの境界を生きる人々：現代沖縄のシャーマニズムを再考する』創元社。



吉田：女が三人そろうとユタごと、そしてコーヒータイム

- 松園万亀雄 1970「沖縄の位牌祭祀その他の慣行にみられる祖先観と血縁観について」古野清人教授古稀記念会（編）『現代諸民族の宗教と文化：社会人類学的研究』社会思想社, pp.269-296。
- 村松彰子 2010「アクチュアリティの世界を生きる：当事者抜き決定をめぐって」小田亮（編）『グローバル化と共同性』成城大学, pp.217-246。
- 森田真一 1997「家を守る女性たち：沖縄久高島の神祭祀をめぐって」『日本民俗学』217, pp.1-31。
- 吉田佳世 2015「沖縄のユタと女のたまり場」『月刊みんぱく』40(5), pp.2-3。
- 2022「沖縄社会における祖先祭祀と子育ての近接性に関する人類学的考察：沖縄本島・X区の子をもつ女性に着目して」『追手門学院大学地域創造学部紀要』7, pp.45-62。
- リーブラ, W. P. 1974『沖縄の宗教と社会構造』崎原貢・崎原正子（訳）弘文堂（Lebra, W. P. 1966 Okinawan Religion: Belief, Ritual, and Social Structure. University of Hawaii Press.）

2023年2月28日受理